

どになっています。薄い敷布団一枚で六人が寝て、身動きも出来ないのですから無理ありません。牧場の獣医に薬を買ってきてもらい、処置して頂きました。

体もはれてきて「あと二、三日でしよう」と言われても、どうにもなりません。

そんな時、家を間違えて日本人医師がひょっこり入って来ました。それも牡丹江で、長男が胃潰瘍にかかり、お世話になった日赤の医師でした。

これはこれと言う話から「大変ですね。どうして医師に診てもらわないのですか」と聞かれ、事情を話しました。背骨の出るほどの床ずれの治療法も教えて頂き、長女がお薬を頂いて来てくれました。

あと二、三日かと思っていた病氣

も、脳症の高熱も一週間で回復しました。

▽引き揚げ開始

半年の長い病氣にも、やっと笑顔が戻りました。

七月ごろから引き揚げの話もチラホラ聞こえてきます。もう、きびだんごも売れなくなりました。引き揚げ準備で皆さん、道中食のカンパンを注文してこられます。

ほつほつ、主人の歩行練習もさせなければなりません。二階からおりる練習、一段、一段がやっとなり半年も寝ていたのですから大変です。八月末にやっと外へ出られるまじになりました。

九月初め、いよいよ難民の「内地送還」の日程が知らされました。ほかの皆さんは「難民登録」を拒否さ

れていたもので、仕方ありません。私たち六人だけが帰ることになりました。

大病のあとですから、歩けるといっても、やっとヨチヨチ歩けるだけで、耳も聞こえません。

道中の食糧のカンパン、お弁当のお米を買いました。(それまでは国民軍の残飯をもらってきて、空き缶を食器にして食べていました。長い道中ですし、蓄えも出来たので思い切りました)

慌ただしい日がすぎ、当日になりました。腐らない用心に梅干しを入れて炊いた御飯を五日分おにぎりにして包み、いよいよ新京からコロ島へ出発です。

栄養失調でやせ細った三男を背負ったの出発でした。代用食を買って下さった方たちがビックリして「赤